すいません、『エクスタスの裏ワザ』を解禁します。

原作改編

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

※漫画原作二巻及びＴＶアニメ六話視聴推奨※
絶対正義を掲げる『セリュー・ユビキタス』は、暗殺を終えたナイトレイドの『シェーレ』と『マイン』の前に立ちふさがる。再生し続ける生物型帝具『ヘカトンケイル』の奥の手を前に、シェーレは『エクスタスの裏ワザ』を解禁するのだった。　絶対正義を斬る！　原作改変。

目次

奥の手を斬る！ ―― 1
絶対悪を斬る！ ―― 6
絶対強者を斬る！ ―― 14
シェーレを斬る！ ―― 19
絶対服従を斬る！ ―― 24
主従関係を斬る！ ―― 34
仲間を斬る！ ―― 40
あとがき ―― 52

奥の手を斬る！

ナイトレイド入りたてのシェーレがため息を吐く。
彼女が吐息を洩らすのは決して退屈だからではない。革命軍にスカウトされてから役に立てなかった自分が初めて期待に応えられてほっとしているからだ。手にしたハサミ型帝具『エクスタス』の感触を確かめながら喜びに打ち震えた。
「すいませんボス、この帝具、私にしっくり馴染むようです」
「おめでとう、まさかシェーレが『エクスタス』を使いこなすとはな」
ふたりがいるのは竹林。
シェーレの周りにはこの地域で最も耐久力のある『ガチガチ竹』が無様に転がっている。彼女を中心として、キレイに３６０度、エクスタスの届く領域すべての竹を切断していた。ナイトレイドのボスであるナジェンダは竹の綺麗な切り口を見て感心する。
「この帝具、そんなにスゴイものなんですか？」
「使ったのにわからんのか?!」
「いえ、なんとなく聞いておこうかなって」
「マイペースな奴め。いいか、ハサミ型帝具『エクスタス』は万物両断、つまり『なんで

も斬れる帝具』だ。鎧だろうが武器だろうが、あとは試したことはないが『帝具』だろうと切断できるだろうな。てっきりワタシのような『頭のキレる人間』が使い手になると思っていたが、よりによってシェーレとは、正直意外だったぞ」
「話はよくわかりませんが、つまり私が『ボスのように頭のキレる人間』だったということですか？」
「それはない」
「あ、なんかボスが怒ってます。なんかもう、すいません、すいません」
　シェーレはぺこぺこと頭を下げる。
　話が脱線するのは、彼女にとって呼吸をするのと同じことだった。掃除や洗濯、料理調味料の発注まで何をやらせてもダメなシェーレは天性のおっちょこちょいだった。そんな彼女でも帝具を使えるのだから、ナジェンダの驚きようにもうなずける。
「それよりシェーレ、手は大丈夫か？」
「え？」
「普通の使い手なら、エクスタスの取っ手に触れただけで斬れてしまい、まともに掴むことさえできなかったんだ。すこしでも痛みや違和感があるなら言ってみろ」
「いえ、なんともありません」
「そうか、ならいい。だが過信はするな。エクスタスの万物両断は刃の内側だけだ。そ

して奥の手の『目くらまし』は相手のスキをつくるためのモノだ。暗いからって灯り代わりにしないことだ。わかったな」
「え、あ、おまかせあれ、です」
本当に大丈夫か、とナジェンダは思う。
万物両断『エクスタス』の奥の手。一斬必殺の村雨とはまた違う『必殺』を備えたこの帝具の奥の手がまさか『目くらまし』だとはだれも思わないだろう。逆にこの意外性が初見殺しとしてうまく作用する可能性もある。
「しかし、その、なんだ。基本性能が凄まじいだけに、奥の手が『目くらまし』とは、その、あれだな。ちょっと地味な帝具だな」
「そうですか？　ぴかぴか光って派手な帝具だと思いますけど」
「……そうだな、たしかに派手だな」
――そういう意味じゃない、という言葉をナジェンダは飲み込んだ。
シェーレに説明しても、わからないことは目に見えているからだ。
「とにかくこれでエクスタスはシェーレのものだ。来たるべき暗殺に備えてきっちり磨いておけよ」
「あのーすいません。ボスに見てほしいものがあるんですけど」
シェーレの言葉にナジェンダは足を止める。

彼女はもじもじと、なにかを言いたそうにして、やっぱり止めとこうか葛藤しながらも考えている真っ最中だった。ナジェンダはナイトレイドのボスとして部下の話を聞いてやらねばならない。

「ん？　どうした？　言ってみろ」

「このエクスタスって帝具、なんか文献にはない使い方があるんですよ」

「なんだと!?」

ナジェンダは素直に驚いた。エクスタスに触れて間もないシェーレがもうすべてを把握しているかのような物言いだったからだ。文献には奥の手が載ってないから『目くらまし』だけで充分な情報だったが、文献に未記載の情報があるならこれほど嬉しいことはない。

「それは本当か!?」

「えっと、たぶん。私はてっきり、こっちが『奥の手』だと思ったんですけど、見てもらえますか？」

「もちろんだ。文献にも載ってない、噂さえ聞いたことのないエクスタスの『裏ワザ』、ワタシに見せてくれ」

シェーレは期待に応えるため、もう一度だけエクスタスのカバーを外した。

そして、ほどなくして帝具の文献に新たな一行が付け加えられた。

――『万物両断エクスタスの裏ワザの使用を一切禁ずる』、と。

絶対悪を斬る！

「止まれ、そこのふたり。ナイトレイドだな？」
帝都警備隊セリューユビキタスは公園に潜んでいた。
深夜のこの場所は広いにも関わらず人が通っても目立たない構造になっている。心理的にも警備的にも『警護する必要性が薄い』とされるポイントだった。だからこそ彼女はここにナイトレイドが来るだろうと夜ごと身を潜めていた。
そして、セリューの思惑はこうして的中したのだ。顔を見られてしまったマインはやれやれとセリューへ話しかける。
「アタシらを待ち伏せたあげく、一発で見抜くなんてやるじゃない」
「……」
「気に入ったわ、アタシらと一緒に来ない？　アンタならスカウトしてあげてもいいわ」
「……スカウト？」
「そう、腐った帝国を一緒に変えようって誘ってんのよ。アンタにその気があるならアタシが紹介してあげる。まあ悪いようには――――」
「――――黙れ、オーガ隊長を殺したお前らの軍門にくだるわけないだろう」

マインは心の中で舌打ちする。

怨恨、こういった復讐鬼はどうしたって仲間にならない。もともと帝都警備隊員など引き抜くつもりは毛頭ないけれど、確定的に付け入るスキがなかった。どうあがいてもこの場で決着を着けなければならない。

「わたしは絶対正義の名のもとに、悪をここで滅するッ！」

「あらそう、じゃあアンタが消えなさい――――！」

返事と同時に、パンプキンの光線を放つ。

衝撃波の塊、極限まで圧縮された一筋の光は一直線にセリューへと向かった。直撃すれば、銃弾のように人体を貫通しうる破壊力を秘めている。しかも射撃の天才であるマインが放つ一撃は的確に心臓を狙っていた。

必殺の一撃に、セリューは余裕を見せていた。すでに彼女は安全圏に入っていたからである。

足元にいた犬型生物帝具『ヘカトンケイル』が本性を表わす。

白い身体は大きく膨張し、セリューを弾幕から守る壁になっていた。マインの放った光線は一発も貫通することなく、コロの体内で消滅する。

そして、間髪入れずに首が斬れる。

セリューたちの死角から、エクスタスが繰り出されたのだ。エクスタスの刃はコロの

首を斬り裂き、大量の赤い血液を周囲にまき散らす。傷は深く、だれがどう見ても致命傷なのは確実だった。

しかし、コロは死なない。首を斬られても生きていた。

そして、一旦後退したシェーレは傷口の再生を目撃する。

「やはり、あれは帝具『ヘカトンケイル』で間違いないですね」

「核を潰さない限り永遠に再生し続けるって噂は本当らしいわね。めんどくさいわ」

「おまけに斬られる前より確実に強くなってます。気を付けないと」

「ああいうタイプは『使い手』を叩くに限るわ、良いわねシェーレ」

コロの修復が完了する。

セリューはしたたかに二人の戦闘能力をはかっていた。万物両断エクスタスと浪漫砲台パンプキン、そして扱うふたりの技量、それらを想定してこれからふたりがしてくるであろう抵抗を推測する。そして、すぐにプランがまとまった。

「コロ、『腕』――――」

セリューの命令とともに、コロに新しい『腕』が生える。もともとあった可愛らしい肉球をした手は危険種顔負けの怪腕へと変化した。ひとたび掴まれれば骨など砕けてしまうのは目に見えてわかる剛腕だった。

「――――そして『捕食』ッ！」

コロはマインに向かってダッシュする。人間さながらの腕振りと鬼の形相で二人に迫った。

「ちょっとちょっとちょっとぉ!? こっち来んなぁ!」

マインは慌ててパンプキンの標準を定める。いくら再生する帝具といえど、足を狙撃すれば転倒することはよくわかっていた。一撃で沈める火力に乏しい以上、マインの狙いは下半身、それも足の親指付け根である。

しかしパンプキンの狙撃は失敗に終わる。

なぜならコロが跳んだからだ。2メートルはある巨体が空中を飛んだのである。パンプキンの光線を躱し、なおかつマインに喰らいつかんと無数に牙が並ぶ大きな口を開いた。

――あ、死んだこれ。

マインは一瞬、死を覚悟した。次の引き金を引くより先に喰われる。けど足がすくんで逃げられない。コロが迫るスロー再生のような映像を眺めている自分がいる。

マインの前に、シェーレが立ち塞がった。

「マイン、私の後ろへ」

シェーレが帝具エクスタスを横に構える。受け止めるつもりだ。しかしそれには圧倒的に重量が足りないことはわかっていた。マインは瞬時にそれを理解し、シェーレの

背中を支えた。
轟音とともに激突するコロとエクスタス。
突進力と重量のあるコロ、シェーレのエクスタスがいかに頑丈であるといえど、力比べにおいて圧倒的な力量差があるのは明白だった。それをカバーするようにマインがパンプキンを後ろに連射する。反動で少しでも押し負けないように。
結果、コロの突進は止まった。
エクスタスがコロの歯を受け止める形で止まったのだった。
ここからは、シェーレの仕事である。
「すいません、すこし目を閉じててください――――『エクスタス』ッ！」
シェーレのエクスタスの奥の手が発動する。
まばゆい閃光、直視すればしばらく行動不能になりかねない強い輝きだ。ネタを知っているマインはともかく、コロにはなにが起こったのか理解できないようだった。コロが思わず口からエクスタスを放すことは生物的本能と言っても良かった。
コロは怯んで後退する。
シェーレはそのスキを逃さない。ハサミを開いて最大限のリーチを確保したまま思い切りエクスタスを振りかぶる。そして、コロの首を一刀両断した。
「――すいません」

「ナイスシェーレ」

コロの胴体ほどある首が地面に落ちる。ドチャっと赤い血が公園の床を汚した。いかに生物型であろうと頭を潰されては行動することができない。使い手を殺すまでの時間を稼ぐには充分だと判断したのだ。

コロは完全に活動を停止した。それでもセリューユビキタスの表情は余裕そのものだった。

「充分だ、コロ。『戻れ』」

突然、首なしのコロが動き出す。落としたはずの首と血液は蒸発をはじめ、蒸気が首へと集まることであっという間に首の切断面から新しい頭が生えてきたのだ。核があるだけで決して死なない千年生きた生物にとってはこの程度のダメージなど珍しくないようだ。

「あらあら、なんとまぁ――」

「うへぇ、これだけ復活が早いと嫌になるわね」

コロは、セリューの横へと戻っていった。さっきの切断でより強く、たくましくなった首をセリューに撫でられる様子は本物の犬のようだった。彼女の笑みは、余裕と怒気を孕んだものだった。

「たしかに見たぞ、ハサミ型帝具の奥の手。なるほど大したことはないな」

「……そういうアンタの帝具こそ、よっぽど核が大事みたいね。とっさに庇う仕草と今の一撃で大事なところの位置はもうバレバレなんだから」
「そうやって強がっておけ。最後に勝つのは正義なのだからな」
　セリューはシェーレに向けて指を指す。
「ナイトレイドのシェーレに判決を言い渡す！　お前は殴殺刑のあと、コロの餌の刑だ！」
「……お腹壊しますよ」
「次で終わらせるぞコロ、準備はいいか――――」
　コロは手を地面につき、お座りの体勢になる。
「――コロ、『狂化』ァ！」
　瞬間、コロの身体が真赤に変貌した。大きな瞳が赤く血走る。全身の筋肉が膨れ上がり、首輪を引きちぎってもまだ太くなっていく。筋骨隆々の身体。コロは『狂化』によって更に強くなっていった。
　そして、耳を塞がざる負えないほどの『咆哮』。町全体に響き渡る音の振動は間近にいるふたりの鼓膜を容赦なく叩く。圧倒的な存在感に大気が震えた。
「さあ、狂化のギアを上げろコロ、絶対正義は悪に屈してはならないッ！」
　これが帝具ヘカトンケイルの奥の手。

数カ月のオーバーヒートと引き換えに得た圧倒的な力だった。
シェーレは赤く染まったコロを見て、考える。この場でふたりとも生還できる可能性が高い手段を模索した。完全に怯えているマインに耳打ちをする。
「マイン、使い手の方はあなたに任せます」
「え？」
「私はあの生物型をなんとかしますので」
「なに言ってんのよ、あんなのひとりで相手に出来るわけないじゃない」
「そうかもしれません、けど私にはトッテオキがありますから」
シェーレはエクスタスを振り回し、血糊を飛ばす。そして、マインの前に盾として立ちはだかった。この場で最も強い存在として君臨するコロへと対峙する。
「すいません、『エクスタスの裏ワザ』を解禁します」
コロに言ったのか、あの日のボスに言ったのか本人にもわからない。

絶対強者を斬る！

セリューは断罪の言葉を告げる。

「コロ！『粉砕』ッ！」

狂化されたコロはシェーレとマインに向かって襲い掛かった。まさに特級危険種クラスの強さにまで跳ね上がった帝具ヘカトンケイルは強化された身体を存分に使い、ナイトレイドのふたりに迫る。

「あなたの相手は私がしてあげますっ！」

シェーレは雑木林に向かって走った。この場所でエクスタスの『裏ワザ』を使えばマインを巻き込んでしまうという彼女なりの配慮である。さらにコロの狙いが彼女であるとわざわざセリューが宣言してくれたのだから心置きなく逃げられる。

すべては、ふたりでこの場を切り抜けるために。

シェーレはしばらく走った後、足を止める。狂化したコロから逃げられないと判断したのだろう彼女は先ほど受け止めたようにエクスタスでコロの突進を防御する構えを取る。

「さぁ、かかってきなさいっ！」

轟音とともに、シェーレはコロの攻撃を受ける。打ち上げ気味に繰り出されたコロの拳はシェーレの身体を上空へと吹き飛ばした。地面を転がりながらも、彼女はなんとか受け身を取る。

シェーレは雑木林まで殴り飛ばされた。

予想外な威力である。殺したはずの勢いに押され、巨木に背中を強く打ち付ける。想定以上の力に肺は呼吸をすることを忘れ、口の中は血の味でいっぱいに広がった。

――なんて怪力、直撃なら間違いなく死んでた。

しかし、運は彼女を見離してはいないらしい。

遮蔽物の多い雑木林は殺し屋にとって最高のフィールドだった。コロの動きを抑制し、なおかつエクスタスを斬りこむには程よい間隔で樹木は生い茂っている。一騎打ちに必要な最低条件は満たしていた。

コロが雑木林に入ってくる。夜の雰囲気と公園からのバックライトのせいで三割増しの怖さを演出する帝具ヘカトンケイルに対して、シェーレは対峙した。

――ただの一撃も喰らわず、核を砕く。

シェーレの孤独な戦いが幕を開ける。

彼女は縦横無尽に動き回った。暗殺者特有の『足音のない走り方』でコロに居場所を

特定させないようにするためだ。追ってくるコロに対してあくまで流動的に、付かず離れずを繰り返しながらの接近戦を挑む。

ヒット&アウェイ。コロの身体を端から刻んでいった。

しかし、コロはすぐに対応してくる。シェーレが攻撃しようと踏み込む一瞬に合わせて拳を振り回してきたのだ。目で頼らなくとも、鼻や耳の感覚器官を使って彼女の動きを捕捉しつつあった。ほとんど視覚の不利はないようなものだった。

千年生きようが、やはり獣である。自然の戦場は彼らの領域だった。

ここにきて、シェーレが追い詰められる形になった。

「それでも、私は、負けません！」

シェーレはエクスタスの奥の手『金属発光』を使う。暗がりでの強烈な閃光は効果絶大であり、コロの視界は一瞬にして真っ白な世界に包まれる。そのスキに、彼女はコロの懐に潜り込んだ。

シェーレは、コロを切り刻む。

エクスタスの最大射程範囲を維持しながら、コロの身体をなます切りにした。一撃ごとにコロの身体は部位単位で寸斬りにされていく。豪快に切り分けられながらも、コロの再生は始まっていた。

終わらない再生と限りあるシェーレの体力。勝負は明らかだった。

それでもシェーレは、核を斬るためにコロを刻む。

そして、ついに終わりが見えた。

コロが、エクスタスの刃を受け止めたのだ。斬れない峰の部分を器用に掴み、そして決して放さないのは、すでにエクスタスを見切っているからだろう。

武器を押さえてしまえば、もう攻撃はされない、と理解してるのだろう。

シェーレはエクスタスを取り返そうとハンドルを引くけれど、びくともしない。時間が経つにつれ、コロの切り落とした頭部は再生していく。そんな様子を見せつけられながら、彼女は武器を取り返そうともがくことしかできなかった。

「うう、動かな――」

コロががばっと大口を開く。無数に並ぶ歯、人ひとり丸呑みできそうなほど大きな口はシェーレの頭を齧るためにゆっくりと近づいてきた。眼前に広がる圧倒的な死の予感は、帝具戦の残酷な現実を連想させる。

シェーレは走馬灯をみていた。

アカメと料理した時の思い出、初めてエクスタスを獲得した時にパーティを開いてくれた時の思い出、ナイトレイド全員でバーベキューをした時の思い出。みんなみんな、私の大切な宝物。

そしてシェーレは涙を流していた。

ボス、マイン、ブラート、ラバック、アカメ、レオーネ、そして――。
新入りの、泣きじゃくっていた少年の顔が頭をよぎる。
すいません、タツミ。たぶんもう、抱き締めてあげられません。
ですが、許してください。何もできない私だけど、今こそ――。
――運命にあらがい、切り開きますっ！
「――『エクスタス』ッ！」
シェーレは、最後の金属発光を放つ。
轟音、そして同時にコロの親指が切断される。なにが起きたのか、コロにはすぐ理解することができなかった。強烈な閃光は、いままでの金属発光とはまるで違う『優しい光』だった。
コロは確かに見た、強い輝きを放っているシェーレを――。
そして、闇夜に煌めく『二刀流』を――。
エクスタス、裏ワザ、自らの限界さえ断ち切る二刀流の帝具である。
楔から解き放たれたエクスタスに斬れないものは、ない。

シェーレを斬る！

エクスタスの大きな弱点は『斬れない峰』にあった。

『防御に使える』という事はつまり『斬れない部分が存在する』ということだ。下手に斬れてしまえば斬りわけられた攻撃がエクスタスを超えて被弾してしまう。防御に使える頑丈さは、同時に『斬れない峰』という弱点を生み出した。

ゆえに、エクスタスには『裏ワザ』が存在する。

エクスタスの楔となるパンダを外すことで『三つ』の能力を解放する。

まずは『二刀流』――――万物両断の双剣は圧倒的な攻撃手数を生む。そして小回りが利くようになったことでハサミ型の時よりも素早い動きを可能にした。

次に『峰の万物両断化』――――ハサミとしてしか万物両断を発揮できなかったエクスタスが『両刃の剣』となる。防御を一切捨てた『超攻撃特化型』である。

そして最後に、シェーレの身体にも劇的な変化が起きていた。

『リミッターの切断』――――彼女の肉体はまるで閃光のような輝きを放ち、限界を超えて肉体強化されていた。エクスタスのハンドルから回ってくる『毒』によって、肉体の持つ潜在的なリミッターを強制的に切断していたのだ。

これが、エクスタスの裏ワザ。
真の『万物両断』に到達した者のみに許される最後の手である。
「すいません、すぐ楽にしてあげます」
コロは、いつのまにか威嚇していた。狂化されて、理性をほぼ失ったはずのコロに残された『野生』がシェーレを危険だと認めてしまった。いままで自己再生能力に任せて襲いかかっていたけれど、それさえできない。
代わりに――――シェーレは動く。コロが反応する間もなく、一撃で首を落とした。あまりの速さに、咄嗟の回避行動さえ間に合っていない。いまの彼女はコロの反射神経より速い攻撃が可能だった。
コロは頭を刎ねられながらも、即座に反撃する。シェーレがエクスタスを握り直す頃にはすでに頭の修復は六割ほど終え、首が完全につながってない状態でも反撃してくるのだった。
「また『再生』ですか……しかしもう、何の意味もありません！」
反撃してきた腕を、シェーレは斬り捨てた。速すぎて反撃さえできない。手を出せば手が、足を出せば足が斬られる絶対領域を前にコロは初めて恐怖を感じていた。
シェーレが、コロを中心に動き回る。
目でも鼻でも耳でも負えない超スピードの攻撃を前に、帝具ヘカトンケイルは翻弄さ

れていた。狂化しているのに、まるで捉えられない。パワー、スタミナ、生命力をはるかに上回るコロが、たった一つ、飛び抜けたスピードの前に手も足も出ないのだ。

右腕、左足、首、右足、左腕、首……コロをすり潰すように切り刻んでいく。

再生がもうまるっきり追いついていない。逃げるスキさえない。

シェーレは、『裏ワザ』の最終攻撃に移る。

この最終攻撃には『制約』がある、一度加速に入ったら、終わるまで止まることができない。止まった時が最後、『裏ワザ』が強制解除されてしまう。これが生涯最後になってもいい、という覚悟で彼女はこの最終攻撃にすべてを賭けた。

コロの身体をミンチにする。本能的に核を守ろうとする腕を落とし、足を削ぎ、首を刎ねていった。ブロックサイズにまで肉片にしていく中、ついに目標物が顔を出す。

――ついにコロの体内から『核』を見つけた。

薄紅色の球体、上質な宝石のように怪しく輝く『帝具ヘカトンケイルの核』だった。

シェーレは、コロの身体から『核』を周辺の肉ごとそぎ落とす。

地面に落ちる核、と同時にコロの肉体は活動を停止する。核が無ければ再生しない。つまり、脳みその切り離された今のコロに復活する術はないのだ。

シェーレは、エクスタスを逆手に握り直す。

裏ワザ最高のスピードまで上げる。コロが二度と復活しないようにエクスタスを振

り上げ、空高く飛び上がり、地面に転がる核に向かって落下した。
「これでラストですっ！」
二つの刃を手に、全体重を乗せて『核』を刺し貫く。最終攻撃の余波が雑木林の木々を軽々と切断し、地面に永久に消えない爪痕を残した。シェーレの輝きが、まるで木漏れ日のように雑木林全体を照らしたのである。
そしてシェーレの身体から、輝きがなくなっていく。地面に刃元まで埋まったエクスタスから手を放すと、その場で尻餅をついた。
すべてを懸けた裏ワザは、時間切れになる。
「ふぅ、すいません。終わりまし……え？」
ゆっくりと目を開けたシェーレは『ある異変』に気付く。
目の前がぼんやりと、水中のように滲んでいることに気付いた。彼女ははっと気づいたようにとっさに地面を手探る。
「あ、メガネメガネ……」
あまりの速さに、シェーレのメガネが付いてこなかったのだ。跳躍する時の最高速度の時、メガネを落としてしまったようである。暗がりのなか、彼女は懸命に自分の体の一部を探した。
「あ、ありましたっ！　私のメガネ！」

夜の闇の中でようやく落ちていた黒ぶちのメガネを拾い上げる、ちょっと付いた汚れを払うと、目の前にある状況を初めて目撃した。

すべてを確認して、シェーレは落胆した。

地面に深々と突き刺さる二対のエクスタス、その隙間に転がるほぼ無傷の『ヘカトンケイルの核』を見つけたのだ。最後の最後、メガネが外れたことによって手元が狂ってしまったのだ。

外した、トドメを外してしまった。

「は、はずしちゃいました」

もう一度、破壊を試みようにもエクスタスが地面に突き刺さってシェーレのチカラでは抜けそうにない。そして彼女の身体は裏ワザ発動の代償である『全身の深い裂傷』によって満足に核を破壊する火力がないのだ。ミリ単位で動かしただけで、ナイフで刻まれるような鋭い痛みが走る。

結局、シェーレはヘカトンケイルを殺しきることができなかった。

「本当にすいません。あとはマインに託します」

シェーレは、遠くで戦うマインに命運を託した。

絶対服従を斬る！

コロを退治したシェーレは、マインの方へ目を配る。
マインは帝都警備隊員の少女ひとりを相手に苦戦を強いられていた。
帝都警備隊セリューユビキタス。帝具ヘカトンケイルの使い手であり、トンファーを使った接近戦を主とした戦闘スタイルを持つ少女である。
マインが追い詰められるのには理由があった。
それは、『ピンチに強い』とされる帝具パンプキンを持つがゆえの苦悩だった。
「ああ、やっぱり。マインのパンプキンは一騎打ちには向いてませんね」
マインは憎らしそうに歯噛みしていた。帝具なし、それに一対一の相手ではパンプキンの精神エネルギー弾に威力がない。彼女にとってあまりに有利過ぎる状況は逆に決定打を奪い去ることになっていた。
そして、セリューユビキタスの地力の高さである。
いくら精神エネルギー弾の威力がなくなったとはいえ、セリューの仕込みマシンガン『トンファガン』程度の殺傷能力は持っている。しかしセリューの身体能力はマシンガ

ンの弾程度ならトンファーで叩き落とすほど鍛えられていたのだ。
マインに決定打はなく、限りある精神はセリューに削られていった。
瞬時に把握できたシェーレは、マインを手助けしようとする。
「うーん、ピンチ、ピンチですか。困りましたね。そう簡単に危機なんて落ちてないと思うんですけど」
マインを追い詰めればいい。そうすればトンファーごと敵を粉砕してくれる。
シェーレはマインを追い詰める方法を考えた。
「ああ！　閃きました！　援軍が来たって煽ればいいんですね！」
満足に戦えないシェーレにできる最大の援護であった。もちろん本当に呼ぶわけではなく、あくまで『援軍が来た』と仮定した演技である。コロを始末できたことを伏せて、絶望的状況を煽るようにしなければならない。
「行きますよぉ――――せーの！」
シェーレは、大声を上げようとして――――異変に気付く。
バラバラにしたコロの肉片が、動いていたのである。
「マ――――、え？　なんで動いてるんですか？」
振り返ると、ヘカトンケイルの核に薄い膜が張っている。
――ーコロの肉片が、再生しつつあるのだ。

「……まぁ、こんなになってもまだ、再生するのですか……？」

あわててシェーレは、『ヘカトンケイルの核』を蹴りつけた。しかし、肉壁に覆われた核には傷一つ付かない。そして核はかなりの重量があり、シェーレの蹴りでは動かすことさえできない。

――しまった、これではもう手の出しようがありません。

それでもシェーレはヒールの踵で踏みつける。しかし肉の壁は思ったよりも厚く、中にある核まで届くことはなかった。硬く弾力性のある肉壁は、どんどん大きくなっていく。

もたついている間にも、核は第一形態のコロまで復元した。

「これは、まだ蘇生している!?」

おそらく第二形態の『腕』まで復活するつもりだろう。肉片の集まり具合が身体周辺から腕にかけて集中していたからだ。

シェーレは、急いでエクスタスを引き抜こうとする。

しかし、裂傷で手に力が入らず、深々と刺さったエクスタスが抜けない。あと一分もすれば、コロは修復を完成させるだろう。

焦りは、シェーレの判断力を奪っていく。

――せめて、時間を稼がないと。

シェーレは、突く刺さったエクスタスを逆に押さえつける。コロの再生に、うまくエクスタスを巻き込むことができれば、コロは動くことができないはずだ。地面に突き刺さった楔として、ヘカトンケイルを拘束できるはずである。
「マイン、急いでくださいっ！　この帝具が、目を覚ます前に……」
コロが復活するのは、時間の問題だった。

マインは、このままいけば勝てると踏んでいた。
浪漫砲台パンプキンの性能は、彼女自身良く知っていたからである。だから、どの程度ピンチなら、どれくらいの弾が出るかなどは感覚で把握していたのだ。
計算からしてあと一分足らず、それでエネルギー弾がトンファーを砕くまで高まる。
それまでは、根気の勝負だった。主に接近戦では勝ち目がなく、掴み技、特にパンプキンを奪われないことが最重要事項だった。さらにトンファーに仕込まれた『トンファガン』の殺傷能力を侮ってはいけない。
「くはは、帝具を持ってるくせに！　全然大したことはないな！」
「……チィ、あんたが強すぎんのよ」
「当然だ！　正義はかならず勝つからな！」
「あんたの歪んだ正義感なんて、聞いてないわよ！」

「悪になんと思われようと知ったことか！」
セリューがトンファガンを連射する。的確に急所を狙ってくる銃撃を、パンプキンを盾にすることでなんとか凌いだ。しかし、その間に迫ってくるセリュー本体はどうしようもない。
パンプキンごと殴られて、木に背中を強打した。痛みに悶絶する間もなく追撃してくるセリューのトンファーを前転することによって回避することに成功する。攻撃の余韻に浸っている彼女のスキを突いて、マインは身を隠した。
「おにごっこの次はかくれんぼか？　悪はお前らだと言うのに、皮肉なものだな」
鬼の形相をするセリューが言うと説得力がない。
――なんとか、ピンチをつくらないと。
マインのいくつかまとまった追い込みプランを展開する。
「あんた！　ナイトレイドに恩師を殺されたんだっけ？」
「……それがどうした？」
「なんで殺されたかわかる？　オーガは油屋ガマルと結託して罪のない善良な帝国民に濡れ衣を着せて処刑していたのよ！　これがアンタの恩師の『正体』なのよ！」
「悪の言葉を信じる理由がない」
「可哀想なやつ、オーガ隊長に都合よく教育されて、使いやすいコマにされてたのね」

「だまれ！」
「いまのアタシが何言っても聞かないわよね。でもアンタらを見る帝国民の目を思い出してごらんなさい？　怯えた目をしてる、愛想よく笑っててもすぐに逃げるように退散していったんじゃない？」
「だまれだまれだまれっ！」
「守るべき帝国民を殺して、アンタ、なんのために闘ってんのよ?!」
「――――だまれえ！」
セリューは、茂みに隠れるマインに発砲する。彼女は木の影に隠れて銃撃をなんとかやり過ごす。
しばらくの静寂、そしてセリューはつぶやく。
「ワタシは正義の為に戦う。ごくごく少数の帝国民など知ったことではない」
もう手に負えない、とマインは思う。バカは死ななきゃ治らないとはよく言ったもんだ、あいつの中では帝国民など、もっと言えばオーガ隊長さえどうでもいいのだ。自分の正義のために、戦う理由が欲しいだけなのだ。
たぶんオーガ隊長が革命軍に裏切ったとしても、容赦なく斬り捨てるだろう。なぜならこいつが戦う理由は『正義は悪に屈してはならない』という強迫観念なのだから。
「そう――――じゃあ、最後に一つだけ言っておくわ」

「……？」

「そのオーガ隊長を殺したの――実はアタシなのよね」

セリューの血液が沸騰する。

口に出すことで誤魔化していた殺意は彼女のトンファーを握る手を震わせた。

「きさま、よくもよくもよくも――オーガ隊長を殺したなぁあああああああッ！」

セリューはトンファガンを乱射する。

木陰に隠れるマイン目がけて、障害物など関係なしに撃つ続けた。やがて銃弾のきれた仕込み銃は、トリガーを引いてもむなしく空音を響かせるだけになった。彼女の激情を利用して弾を無くしたのである。

すべてはマインの思惑通り。

あとは、『援軍を呼ぶ警笛』を鳴らしてくれれば完璧だった。それだけでパンプキンの精神エネルギー弾は彼女のトンファーを砕き、致命傷を与えるに十分な威力まで高まるのだから。

しかし、マインの予想は外れる。

セリューは、弾がなくなっても直接殴りかかってきたのである。

「貴様は、私が殴り殺さねば気がすまない！」

木陰に隠れていたマインを殴り飛ばした。援軍など呼ばない、恩師の仇は自分の手で討つと息巻いたセリューをマインは予測しきれなかったのだ。頬の激しい痛みに、マインは思い知らされる。

「正義は必ず勝つ！」

「寝言は地獄で行ってなさいな！」

マインが、パンプキンを撃ちこむ。人体に当たれば殺傷するに十分な威力だが、セリューのトンファー捌きの前ではまるで意味がない。それでもやらないよりはマシだった。

しかし、セリューは避けない。

トンファーを持っていた右手で受け止める。精神エネルギー弾が着弾した右ひじから先にかけて、跡形もなく吹き飛んだ。想定以上のダメージに、撃ったマインが驚愕する。四肢欠損するほどまで威力が上がってないはず、とマインは思った。

そして次の瞬間、答えを見る。

二の腕から単発式仕込み銃が出てきたのである。おそらく人体改造して、腕を取り外し可能にしていたのだろう。腕が取れたのではなく、自ら切り離したと言った方が正しかった。

「正・義・執・行ッ！」

セリューは、銃撃した。マインは左手を撃ちぬかれ、予想をはるかに上回る威力によって身体は後ろへと吹き飛ばされた。狙撃手にとって命の次に大事な腕を、撃たれてしまったのだ。

「よし――着弾確認ッ！　待ってろ！　いま正義を完遂して……や――」

倒れるマインを追撃しようとしたところで、悲鳴が上がる。

セリューやマインのモノではない。獣の悲痛な叫びであった。セリューにとっては聞き憶えのある声だった。

そして、セリューは目撃する。

――エクスタスによって、地面に張り付けられたコロの姿である。第二形態の腕の状態まで回復していたコロが、動けないでいた。そして、エクスタスを踏みつけることでなんとか押さえつけるシェーレの姿があった。

――しまった、バレてしまった。

再生して目覚めたコロは、暴れだしたのである。

「……コロ！」

セリューの顔は一瞬だけ焦りを浮かべたあと、歪に微笑んだ。

「コロ！　『吠えろ』ッ！」

セリューの命令で、口が開く。

手も足も出ないこの状況において、大音響が飛び出した。音の壁は大気を震わせ、馬乗りになっていたシェーレは紙のように吹き飛ぶ。支えがなくなったエクスタスは、コロの剛腕によって無理やり引き抜かれたのだった。

エクスタスの磔から解放されるコロ。

そしてシェーレにはもう武器がない。

「そのまま喰らい付けェェェェェ――――ッ！」

セリューは、生涯最後の命令を下したのだった。

主従関係を斬る！

決着は、いつだって一瞬だ。

コロが第二形態でシェーレに襲い掛かる。人間を丸呑みにする大きな口が満足に動けないシェーレを捕食するために開かれた。あと一歩、帝具ヘカトンケイルの跳躍によってセリューの命令通りに喰らい付くだろう。

しかし、コロは気付いてしまう。

コロはセリューの方から飛んでくる『殺意』、それは自分ではなく主に向けられたモノなのだと野生の本能が告げていた。コロは一秒に満たない時間の中で、殺意の『正体』を見つける。

茂みに隠れたマインが、銃口を向けていた。

左手を撃たれながらもパンプキンの銃口を両足で挟むことで標準を合わせている。そして銃口からあふれる精神エネルギーの迸りはコロが受けたものよりも鋭く、強烈なのがよくわかった。

セリューはまだ、気づいていない。

コロがシェーレを捕食する様を目に焼き付けようとこちらを凝視している。いつ放たれてもおかしくはないほどに高まったパンプキンの輝きを見て、帝具ヘカトンケイルはいてもたってもいられなかった。

コロは吠える。そして主の下へと方向転換した。

目の前にいる瀕死の敵を見逃し、主の敵へと果敢に飛びかかる。

マインは、冷静だった。

突如、方向を変えて迫りくる凶悪な帝具、外せば次はなく、正真正銘最後の攻撃になるだろう。援護はなく、シェーレの命が乗っている重たい重たいトリガーである。

しかし、だからこそ『パンプキン』は真価を発揮する。

「いっけェェェェェ――――――ッ！」

放たれる、一筋の光線。これまでの中で一番強い輝き。

コロの腹部を、やすやすと貫いた。

決死の一撃はコロを貫通し、さらに後ろにいるセリューの『単発式仕込み銃』を抉っていく。そして雑木林に丸い爪痕を残して決着を迎えた。

精神エネルギーは『ヘカトンケイルの核』を見事に射抜いていた。しかしこれにマインは首をかしげる、なぜなら自分が求めた結果とは違うからだ。

マインは確かにセリューの頭を狙った。コロが迫っていようと関係ない。使い手を

葬ればいう事を聞かなくなるのだから構う必要がないからだ。だが、結果としてセリューの頭を撃ちぬくことができなかったのだ。

答えは、コロ自身にあった。

主を守るため、わざとエネルギー弾を『核』で防いだ。

コロは自らがもっとも硬いと信頼する『核』で受け止め、必殺だったはずの光線をわずかばかりに逸らすことができたのだ。すべては主を守るための決死の献身だった。

そんなことを知るのは、飼い主のセリューだけだった。

第一形態に戻ったコロを、抱き寄せる。

「……コロ、もう治せないんだね。ワタシを、庇ったりするから……」

もう間もなく死ぬ。それでもコロは、賊に対する威嚇を止めなかった。子を守る親のような、必死のうねりが後ろ手にいるマイン達へと向けられる。

マインは、パンプキンの引き金を引く。

しかし、むなしくトリガーを引く音だけが響き、光線が出ることはなかった。

「ダメ、やっぱり弾が出ないわ」

パンプキンは『無抵抗な相手にトドメを刺せない帝具』だった。目の前にただ撃つだけで絶命する標的に対してなんのピンチも感じないからだ。危機的状況において圧倒的な火力を誇るパンプキンの唯一無二の弱点である。

「シェーレ、あとは任せたわ」
「……」
回収したエクスタスを握る。もう充分に振るう事はできないけど、首を刎ねることぐらいはできる。目の前にいる儚い存在を摘み取ることなど容易だった。
シェーレは標的を見て、思ってしまう。
涙を流すセリュー。そして、死にかけのコロ。
それが、落ち込むタツミと慰めるシェーレ自身を見ているような気持ちになった。
結局、セリューにエクスタスが振るわれることはなかった。
「……もう、行きましょうマイン」
「は？　正気!?　こいつには顔を見られてんのよ!?」
「時間がかかり過ぎました。それに、私はどうしても、今の彼女に手を出したくありません」
「……甘いわね」
「すいません」
「まぁ、らしいっちゃらしいけど」
マイン達は踵を返す。あれだけ大音響や閃光、そして破壊を繰り返していたのだから、急いでこの場を離れないと援軍が来てしまうだろう。帝具ヘカトンケイルを失った

彼女にはもう気にも留めない。
そして、それこそ間違いだった。
二人が走り去ろうとすると同時に、セリューがゆっくり立ち上がる。
先ほどまで浮かべていた涙もない、歪み切った顔は明確な殺意を表わしていた。そして口から出てくるのはライフルの銃口である。相手の意表を突き、遠くの敵も狙撃できる奥の手だった。
セリューは、マインの背中に目がけて宣言した。
「正・義・執・行ッ！」
そしてパァン、と渇いた銃声が響く。
撃ちだされた小指程度の殺意の塊は――――硬いなにかに阻まれた。
シェーレのエクスタス。防御にも使えるほど頑丈な帝具が、マインの背中を守ったである。そして防がれた銃弾は、そのまま狙撃手の方へと打ち返されたのだった。
「――――え？」
セリューの額に命中する。
絶対正義の断末魔は、実に情けないものだった。遺言もなく、ただ自らの正義のために殉職した。セリューは糸の切れた人形のように仰向けに倒れ込む。
息絶えたコロに寄り添う形で、この世から去った。

それを遠目で、シェーレは看取った。
こうして、帝都警備隊セリューユビキタスを撃破した。
絶対正義を自称する彼女は、自分の悪意によって殺されたのだった。
「ナイス、シェーレ」
「……はい」
シェーレは勝ったのに、すこし後味の悪さを感じていた。

仲間を斬る！

セリューが倒れた直後、援軍の警笛が鳴り響く。
ようやくと言って良いだろう。マインが先制攻撃を行ってから約５分ほど時間が経っていたのだから遅すぎるくらいだった。異変に気付いた帝都警備隊がわらわらと夜の帝都からわいてくる。
マシンガンを乱射する音が、近づいてくる。
もう包囲されるのは時間の問題だった。
シェーレとマインは雑木林を突っ切る。まだ完全に囲まれたわけじゃない、帝国の包囲網が完成する前に巻く必要があった。交戦できない状態まで追い詰められたふたりは足で逃げるしかない。
「シェーレ！　さっさと逃げるわよ」
「ま、待ってくださいマイン」
「アンタ、もたもたしてたら置いてくんだからね！」
「す、すいま――――あう！」

シェーレは転んだ。剥き出しになった木の根っこに足を取られて、顔から地面にぶつかってしまう。

あまりの痛そうな転び方に、思わずマインは手を貸すのだった。

「あーんもう、なにドジ踏んでんのよ！」

「私が、踏んだのは、木の根です」

「こんな時に天然ボケかまさなくていいから！」

「私は天然じゃありません……おっちょこちょいなだけ、です」

「どっちでもいいわよもう！　ほら、手、さっさと立ちなさい」

「すいませ――――え？」

シェーレの手に力が入らない。自分の足で立ち上がろうとするけれど、生まれたての小鹿のようにふらふらと起き上がるが、すぐにへたれこんでしまった。シェーレ自身初体験でありながら、ついに来たかと思う。

――ーあぁ、なるほど、これが『限界』ですか。

エクスタスの裏ワザの反動が来た。限界を自ら切断したシェーレの肉体的負荷は修復不能の領域に達していたのだ。さっきの弾丸を打ち返した時点で限界値いっぱいだった。

もう、シェーレの足は走ることを拒否していた。

「な、なにやってんのよ。さぁ立って、立ち上がって！　逃げるのよ！」
「……すいません、ちょっとだけ、先に行っててもらえますか？　すこし休んだらすぐ追いかけますから……」
「イヤよ！　絶対イヤ！」
「え!?　マイン!?　なにを……!?」
マインはシェーレを担ぐ。左肩にシェーレの身体を担ぎ上げ、右ひじにエクスタスを引っかけた。エクスタスは使い手ではないマインが触れただけで、彼女の肘に鋭く焼けるような痛みが走る。そして最後にパンプキンを右肩に背負った。
マインは、シェーレを持ち上げながらゆっくりと走り出す。
はや歩きようなスピードになっても、マインは捨てきれなかった。帝具と仲間を斬ることができなかった。
「……マイン、私、重たくないですか?」
「いまアンタの重さを再確認してるとこよっ！」
「もう置いてってください。さっき『もたもたしてると置いてく』って言ってたじゃないですか」
「いいから黙ってなさいよもうっ！　ホントにお荷物シェーレは重たいうえにうるさいわっ！」

「うぅ、すいませんすいません」
どう見ても、小柄なマインには無理があった。膝はがくがく笑っており、セリューから受けた左腕の負傷から血が溢れてくる。それをシェーレにさとられないよう、いつもの声色で誤魔化していた。
全部、シェーレにはお見通しだった。
「マイン、いいアイディアがあります」
「――却下っ～！」
「そ、即答ですか!?」
「どうせ、アンタを囮にして逃げろって言いたいんでしょ？　却下よ却下っ、ピンチに強いアタシが真っ先に逃げてどうすんのよ！」
「……やっぱりお見通しだったんですね」
「それはっ、お互い様でしょ～がっ！」
マインは滝のような汗を流しながら答える。
追い詰められた状況でもふたりとも、自分たちのことをよくわかっていた。そして、このままでは逃げられないこともよくよく承知していた。それを理解していながらも、シェーレを捨てることができない。
シェーレは、もう一度マインに囁きかける。

「……マイン、私はあなたの事が大好きです」
「黙ってて！　気が散るわ！」
「……絶対に死なせたくない、大切な仲間なんです」
「知らないわよそんなこと！」
「あと一回だけなら、エクスタスの奥の手、使えそうなんです。ですからお願いします。私を置いてってください。最期くらい、足手まといにはなりたくないんです」
「それ以上喋ると、アンタのメガネかち割るわよ！」
「マイン！」
　シェーレは謝らなかった。
「後生ですから、私の言う事を聞いてください」
　一生のお願い、まさにいまこの局面に相応しい言葉だった。逃げそこなえば、遅かれ早かれ殺されてしまう。シェーレは決して謝ることなく、真剣な口調でマインにお願いするのだった。
　マインは、歯ぎしりする。
　シェーレに見られないように、涙を流していた。
「わかんない⁉　アタシも、アンタと、一緒なのよ！」
「……え？」

「アンタにも、生きてほしいのよ！　足手まといのアンタがいなくなったら、だれが、アタシをピンチに追い込んでくれんのよ！　だれがこんな、協調性のないアタシとコンビ組んでくれんのよ！　アンタにしかできないんだからね！」
「……マイン」
　シェーレは、気づいた。マインも自分と同じなのだ。自分のせいで仲間を失うのが怖いのだ。殺し屋失格と罵られても、逃げられないと合理的判断ができたとしても斬り捨てられない。
「見てなさいよ！　大丈夫！　ピンチがアタシを強くする！　アタシのパンプキンはピンチになればなるほど火力が上がってくのよ！　こんな絶好のピンチを逃すわけないんだから！」
　まるで、自分に言い聞かせるようにマインは言う。
　そして、シェーレとエクスタスを木の影に隠す。もう逃げられないと判断したマインはここで迎撃するつもりだった。浪漫砲台パンプキンの銃口を『連射型』に取り換えて、精神を集中させる。
「いたぞ、こっちだ！」
　帝都警備隊員が、声をあげる。彼の声を合図にぞろぞろと、仲間が次々と湧いてきた。
「パンプキンを舐めんじゃないわよぉおおおお――――っ！」

精神エネルギー弾を連射する。かってないほどまで火力が高まった散弾は、前方の敵に向かって放たれる。しかし、左腕を痛めているマインには反動に耐えられるわけもなく、撃つと銃口が空へと跳ね上がった。弾の反動でまっすぐ飛んでいかないのだ。
「こいつら弱ってるぞ！　生け捕りにしろ！」
帝都警備隊の男たちが、一斉に襲いかかる。
マインの狙撃は威嚇にしかならない。しかもピンチが近づくたびに反動はさらに増していく。もう、限界。それでも、それでもマインは、引くわけにはいかなかった。
「シェーレは、アタシが守るんだからァ――！」
すると、帝国兵たちの動きがピタリと止まる。

ザクン、と肉が斬れる音がする。
マイン達の背後、木の真後ろに迫っていた帝国兵がドサッと倒れた。シェーレではない何者かが死角から迫る敵を排除したのだった。音もなく現れたのは、かつて帝国にこのひとありと呼ばれた一流の殺し屋である。
ナイトレイドのアカメが、ひょっこりと顔を出した。黒髪赤目の少女、手には日本刀型帝具『村雨』、マインと歳も近い彼女は、息を切らせて走ってきたのだ。
「マイン！　シェーレ！　無事かっ！」

「……アカメ、なんでアンタが」
「助けに来たに決まってるだろう、仲間だからな」
当たり前であるかのように、アカメは答える。
そして、駆けつけたのは彼女だけじゃない。
「そう、仲間の危機に駆けつけるのはアカメちゃんだけじゃないぜ！　ナイトレイド一のトリックスターここにあり！　困った時の何でも屋、ここに参上！」
糸の帝具で木の枝からクモのように降りて来たのはラバックだ。
もう残りの帝都警備隊を始末した後なのだろう返り血を浴びた彼は、目の前にいる帝国兵に姿を見せることに抵抗がない。さらに逃げられぬよう雑木林の木々に無数の糸を張り巡らせているのは容易に想像できた。
「ラバ、遅すぎんのよバカ！」
「主役は遅れて登場するもんっしょ。ねぇそれよりこの登場の仕方どう？　えへへ褒めて褒めて」
「調子のんな、指折れろ」
「生々しい表現やめて！」
帝国兵が、マシンガンを取り出す。
そして、アカメたち目がけて一斉に撃ち始めた。シェーレを守るためにマインがパン

プキンに力を入れる。けれど、アカメは抜刀することもなく片手でマインを静止した。
ここはもう安全圏なのだとわかっていたからだ。
アカメの目の前で、銃弾が弾ける。それはアカメの前に見えない壁があるようだった。
「ふぅ、どうやら間に合ったようだな」
声とともに、インクルシオを装着したブラートが姿を現した。
透明化の奥の手を使ってひそかにアカメたちを守ったのだ。
「……ちょっとなんなのよ、大集合じゃない」
「ラバから緊急連絡が入ってな。手の空いてるナイトレイド全員集合ってことだ。シェーレとマイン、ふたりともよく頑張ったな」
「まったくもう、まったくまったくよ」
「さァみんな仕事だぜ。オレはふたりをアジトまで運ぶから、アカメ達はあいつらの口封じ頼めるか？」
アカメは黙ってうなずく。ラバも『了解』と一言の後、不敵に笑った。
マシンガンを装備してる帝国兵たちに、帝具『村雨』を抜刀した。
「このコンビって何気に珍しくない？　さぁ良いとこ見せるぜアカメちゃん！」
「……帝具使いがいないなら、私ひとりで充分だ――――」

「え、いや、手伝うって！　おれのカッコいいとこみたいでしょ？」
「……行ってくる」
「まさかのシカト!?　無視されるのが一番傷つくんだよアカメちゃーん」
帝国兵に突進するアカメの背中をラバックが追う。
目の前が血の海になるよりはやく、エクスタスを肘に引っかけたブラートはシェーレをお姫様だっこした。インクルシオのマントでシェーレの傷ついた身体を覆い隠して慎重に運ぶ。
帝国兵の悲鳴が聞こえるころには、マイン達は離脱するために走り出していた。
「エクスタスの裏ワザか、反動でこうも酷くなるのか」
「そうよ、大変だったんだからね」
「ん？　なんだマイン。よかったら乗ってくか？　おれが肩が空いてるぜ」
「……結構よ」
「恥ずかしがらなくていいんだぜ」
「そんな心配してないわよ！　だいたいあんたほど女を安心して運ばせられる男もいないじゃない！」
「なんだそれ、どういう意味だ？」
「いい仕事をするゲイだなって褒めたのよ」

「はは、おいおい、誤解されちまうだろ？」
「でも事実でしょ？」
　ブラートは答えなかった。
「あの、ひとついいですか？」
　お姫様抱っこされているシェーレが初めて、口を開いた。
「ブラートにマイン、それにアカメ、ラバック、みんな、ありがとうございます」
　ありったけの感謝を込めた言葉だった。
　ブラートは男らしく『いいってことよ』と一言だけいった。
「シェーレ」
「……はい？」
「もしエクスタスが使えなくなっても、役立たずになった、なんて思うんじゃないわよ、アタシがコンビでいてあげるんだから、感謝しなさいよね！」
「……はい」
　シェーレは心の底から安堵する。エクスタスが使えなくなって、また役立たずに戻ったとしても、マインはコンビと呼んでくれる。これほど嬉しいことはなかった。
　――ナイトレイド、私の居場所。
　――ただいま、帰りました。

気絶したシェーレの顔は、嬉しそうに微笑んでいた。

あとがき

以上、『すいません、エクスタスの裏ワザを解禁します』でした。

後日談としては、この後シェーレは裏ワザの後遺症に苦しめられるでしょう。それほどの覚悟を持たなければ狂化コロに打ち勝つことができませんでした。しかし、タツミを抱きしめてあげるくらいは出来るのではないでしょうか。

たぶん、原作のセリュー・ユビキタスならコロがやられた程度では止まりません。ゆえに今回の状況ではコロが盾になった後、ノータイムで反撃に出たところでシェーレに容赦なく首を刎ねられるでしょう（原作ではシェーレに殺されそうにもかかわらず、助けを求めないという強い子なので）セリューはやはり自分の絶対正義を疑わないで死んで欲しかったので今回のようなオチにしました。

今回はシェーレの『エクスタス』にスポットを当ててみました。万物両断なはずなのにトンファーで防がれているので、『斬れない部分がある』のは確定的だと思いました。だったら防御を完全に捨てた超攻撃特化型という裏ワザを思いついたのです。

二刀流はロマンですね。

帝具ヘカトンケイルの仕様も変わっています。

再生すればするほど強くなる仕様は、シェーレの万物両断と相性最悪なので取り入れてみました。再生キャラは死ぬのが仕事になってしまい、どうしても弱く見えてしまうので、やられるごとに強くなればいいと考えたのです。

エクスタスのデメリットも付け加えてみました。

『万物両断』なのでハンドル部分に触れても斬れてしまうというものです。適合者はエクスタスの毒に対する耐性が高いだけで、裏ワザ解禁すれば手が裂傷だらけになるという仕様に落ち着きました。まさに諸刃の剣というやつです。

エクスタスの毒はシェーレを精神的にも肉体的にも追い詰めるための仕様です。肉体強化はコロのスピードに対して上回らないと勝てないと判断しました。ぶっちゃけるとこの方が強そうだったから、という結果に落ち着きます。

セリューはホントにもったいないキャラでした。

原作ではタツミをワイルドハントの悪行に対して反旗を翻してほしかったです。彼女の正義感では『ワイルドハントが悪を処罰してる』と一蹴されてしまいそうですが、絶対正義の名のもとに、帝国側を苦しめるワイルドハントのひとりくらい仕留めてほしかったです。

書いてて思ったのですが、やはりシェーレの死は『アカメが斬る!』という作品全体

を印象付けるイベントだったと思います。エクスタスの性能上、つばぜり合いができないうえにアカメと若干被る『必殺』なのであそこでの退場が彼女としてもちょうど良かったのではないでしょうか。

奥の手が光るだけ、ではあまりに不憫だったので裏ワザという形で二刀流を書いてみました、書いているうちにどんどん話がまとまってきて満足の行く出来になったと思います。あとは誤字脱字をなんとかするだけですね。

また書きたくなったら書きます。リクエストがあれば感想欄にご記入ください。

ご精読ありがとうございました。